

《研究ノート》

文学を通して考える再生への祈り

——アイルランド・日本の古典を中心として——

深 澤 清

はじめに

本稿はアイルランド・日本の神話と（古典）文学作品を基盤に原点回帰し、先人の声に耳を傾けながら私たちの心の拠り所を探ろうとするものである。その前提には長期にわたる感染への不安やストレスを抱えた大学生の姿があり、若人の精神的な安定と「セルフ・エフィカシー」(self-efficacy) 向上への願いがある。文学の世界はいわば未知なる人々との交流、様々な出来事との出会いの場であり、また人々の生き様や困難を克服した先人の知恵が凝縮するライフスキルの宝庫である。先の見通せない今だからこそ先人の智慧を借り、心の糧を得ることが必要ではないだろうか。「セルフ・エフィカシー」は自然発生的なものではなく、「遂行行動の達成」、「代理的経験」、「言語的説得」、「情緒的喚起」の情報源とそれに伴う誘導方法によって向上が図られることがバンデューラ (Albert Bandura) によって示されている。¹⁾ その意味では、(古典) 文学作品はモデル遂行のための「情報源」として豊富な内容があり、これに象徴的モデリング、暗示、示唆などを補助的に付加することによって「セルフ・エフィカシー」向上のための教育に活かされると思われる。

アイルランドと日本とはともに島国であることから、海の彼方から岸に漂着する者や、逆に海を越えて異郷・異境へ旅立つ者の話など、〈海〉にまつわる神話や民間伝承の話が多くある。またケルト神話・日本神話には地母神、豊穡の女神の活躍が描かれ、生命的躍動感が醸し出されている。大学生の自己再生への祈りを込めながら、まずは〈母なる大地〉・〈母なる海〉をランドマークにして神話・古典文学の世界を巡り、〈ウミの母〉を求めて〈ふるさとがえり〉の旅に出ることにする。

新たな自分への旅立ち

「タラへ帰ろう」(Tara! Home.) ——これは映画『風とともに去りぬ』(Gone with the Wind) の主人公、スカーレット・オハラ (Katie Scarlett O'Hara) の最後のセリフである。映画では「タラ」はスカーレットが育ったアメリカ南部にあり、アイルランドから移住したオハラ家が農園経営で財をなした場所として設定されている。この「タラ」の名はアイルランド人にとっては特別な意味を持つ。「タラ」は古くからケルト民族にとっての聖地であり、特に“Hill of Tara” (「タラの丘」) は

聖パトリックがシャムロックを用いて三位一体を説いたとされる場所である。〈タラへ帰る〉とは、いわばユング心理学でいうところの「集合無意識・普遍的無意識」(collective unconscious)の「元型 (archetype)」として機能する。

ユングは「元型」を「人間の心の内部における表象の可能性 (possibility of representation)」としているが、「元型」は国・民族・宗教・文化を問わず、どの地域の人たちにも共有される普遍性の高いイメージである。具体例としてよく示されるのが「夜の航海 (night sea journey)」で、そのモチーフの起源はネイティブ・アメリカンの神話の世界にあるとされている。つまり朝に東から昇った太陽は正午に天頂に達し、やがて西の海に沈んで巨大な怪魚に呑み込まれる。そしてその太陽は元の東の地平線底まで戻るために「夜の航海」を行い、延々とその周期的なプロセスが繰り返されるという世界観である。「夜の航海」の普遍的イメージはその構成として、太陽-「自我」、海-「無意識」、そして怪魚-「母親・胎内」の意味を内包し、「母胎回帰願望 (原点回帰衝動)」が投影されている。つまり、「海」は〈母〉の象徴となり、「夜の航海」は自我が母胎・原点へと回帰して〈新たな自我・成長した自我〉へと生まれ変わろうとするプロセスである。また「夜の航海」という元型は、「死と再生・終わらなき輪廻」のメタファーとしても機能している。

日本に場を移せば、古来、日本人は普段通りの生活を「ケ」、そして祭礼や年中行事などの特別な日を「ハレ」と呼び、日常と非日常の使い分けをしてきた。疫病や災害などが拡大して憂鬱な気持ちが強くなり、「ケ」の生活が順調でなくなると人々はこれを「気枯れ」=「ケガレ」として忌み嫌い、禊やお祓いなどを挙行し、「ケ」の安定的維持に努めた。まさに「禍福は糾える縄の如し」であり、非日常を通して日常生活は活性化されるのである。身近な例として、長野県・善光寺のお戒壇 (胎内) 巡りは、秘仏の御本尊様の下を巡り仏縁の種を大切に育てていくことを仏様にお誓いする〈行〉であるが、非日常的な体験を通して人は仏種、^{ぶつしゆ}仏性を磨くことができるといわれている。お胎内の暗闇の中で人は雑念を払い、極楽のお錠前を探すことに専念する。これは人類が共通にもつ〈死〉の擬似体験であり、逆にいえば〈生〉の意味を探る契機となる。この〈お錠前〉に触れることが〈場所の理論〉として重要であることはいうまでもない。

寺社に^{さんろう}参籠することを〈籠もる〉といい、また生命あふれる存在に包まれ、護られることも〈籠もる〉といわれる。それは霊力あるものに包まれた空間に身を置くことであり、やがては新たな存在として元の世界への復活が期待されている。〈むろ (室)〉もまたそうした空間であった。オオアナムチが籠もった〈むろ〉は^{かなすくに}堅洲国 (黄泉国) にあるが、オオアナムチは何度も〈むろ〉に籠もることで霊力が身につく、この世に戻ってからはオオクニヌシ (大国主) となる。

日本神話では人がこの世に誕生する時と同じように、神も神界から人の世を訪れる時に赤子となって生まれ来る話がある。高天原から地上に天降るに際して、生まれたばかりの「ニニギノミコト」は^{まことおふすま}真床覆衾という〈おくるみ〉にくるまれる。大嘗祭においては、新たに即位する天皇は「まことおふすま」にくるまる儀式を経ることによって、真の天皇に生まれ変わるという。〈おくるみ〉そのものは母の胎なる子宮を意味し、母の胎に籠もることで新たな存在として生まれ変わるといわれる。日本の説話によく登場する子どもを包んで外界から護る〈桃〉や〈箱〉も、母の胎と考えることができる。〈おくるみ〉とは、子どもが成長していく上での精神的な安らぎとなり、母と子どもの一体感を形成するものである。

母と子の一体感

『万葉集』には天皇・貴族から庶民層に至るまで幅広く人々の歌が収められているが、その中で母・父・父母を詠んだものが百首ほどある。父が十首、母が六十首で全体の六割を占め、数字的には母を詠むものが圧倒的に多い。

「母」は歌の中でどのように描かれているのだろうか。具体例として以下の二首を引用する。この歌は大伴家持が妻（坂上大嬢）の依頼を受け、京にいる義理の母である坂上郎女に送った歌である。ただし、妻からの依頼で書かれたものとはいえ、そこには家持の思いが強く込められており、まるで恋歌のような印象を受ける。もちろん、歌の師匠である坂上郎女に贈る歌であるから少し力が入ったかもしれないが、何か別の意味が隠されている可能性もある。とにかく、詞書には「家婦が京に在す尊母に贈らむが為に、詠へられて作る歌一首并に短歌」²⁾とあり、長歌の後には短歌が続くことになる。

ほととぎす 来鳴く五月に 咲きにほふ 花橘の かぐはしき 親の御言 朝夕に 聞かぬ日まねく 天離
 る 鄙にし居れば あしひきの 山のたをりに 立つ雲を よそのみ見つつ 嘆くそら 安けなくに 思
 ふそら 苦しきものを 奈呉の海人の 潜き取るといふ 白玉の 見が欲し御面 直向ひ 見む時までは
 松柏の 栄えいまさね 貴き我が君 (19-4169)

ホトトギスが来て鳴く五月には、咲き薫る橘の花のように、かぐわしい母上様のお言葉を、朝夕に聞かぬ日が積もるばかりで、都から遠く離れた田舎にいるものですから、都とは山々が隔たっています。山々の間に立つ雲を見ては心休まる時はなく、思う心は苦しくてなりません。奈呉の海の海人が潜って採るといふ真珠のように、拝見したいと思う母上のお顔、直接お目にかかる日まで、どうか常盤の松や柏のようにお変わりなく元気でいらして下さい。母上様。

〔拙訳〕

反歌一首

白玉の 見が欲し君を 見ず久に 鄙にし居れば 生けるともなし

白く輝く真珠のような貴女をみたいと思う私ですが、田舎にいると生きていく気がしません。

〔拙訳〕

長歌にある「親の御言」の「親」とは、母親の意味である。〈妻問婚〉に関連して言葉を追えば、例えば『古事記』や『日本書紀』では「父母」の連称を、(ちちはは / かそいろは / かぞいろは)としているが、『万葉集』では「母父」(おもちち / あもしし)と称する例が多い。³⁾『古事記』では母に対する最高の尊称として「御祖」が使われるが、「祖」は父の意には使われていない。本居宣長は『古事記伝』の中で、「中略すべて御祖とは母を伝えるなり。(中略)父の於夜なるは、本よりのことなるに、母をしも殊に伝える所以は、子母の許に成長しなければ、父よりも親睦く、同じ家に在る故に、朝暮の事にふれても、御祖とは先ず母を云しなり」⁴⁾と述べている。この記述からも、母親が子ど

もの成長過程において最も親しい存在であり、子どもは母方で育てられる婚姻形態があったことがわかる。自明のことだが、親の枕詞である「タラチネ」(垂乳根)は母に由来する。また、生母のイロハ(「いれをはは(入れ緒母)」→いろは)とは、その「を」が入っている母の意、つまり(生み母)のことであり、逆に、実父は「イロチ」とはならず、「カゾ」(「かはせを(交はせ緒)」→かそ、かぞ)となる。結局、子どもと母親の結びつきが強いのは今も昔も変わらないのではないか。

先の大伴家持が京にいる義理の母坂上郎女に贈った歌に話を戻せば、そこにあるイメージは、(山の高さ)、(海の深さ)、真珠の(白玉)であり、さらに(歳寒松柏)のイメージへと繋がっていく。「松柏」には冬の厳しい寒さにも松や柏が緑の葉をつけているという意から、逆境や苦難の時にあっても、志や節操を失わない意味が込められている。象徴的には突起的な形状を持つ男性的な「山」と、すべてを包み込む母性的な「海」のイメージがあり、また真珠が育つ(アワビ)と「白玉」はそれぞれ女体の(陰部)と(乳房)が暗示されているようである。次に貞節を願う意味の「松柏」が登場すれば、この歌には男女の濡れ事に絡む伏線的な意味があると考えるのが自然であろう。ともあれ、日本人にとって「山」と「海」は昔から必要不可欠な存在であることは間違いない。

日本人が眺めるもの

日本人は「海」と「山」の他に、どのような景色に心惹かれ、印象を強くもち、そして精神的に安らぐことができるのであろうか。温故知新、日本の古典にその糸口を探り、『五代集歌枕』⁵⁾を紐解いてみる。この書は平安時代の末期に藤原範兼が編んだとされるもので、『万葉集』、『古今集』、『後撰集』、『拾遺集』、『後拾遺集』の五つの和歌集に詠まれている歌枕が49の項目に分類され、項目ごとに歌枕となった地名が挙げられている。841ヶ所ある歌枕の分類項目をみれば、歌人がどのような景色に着目したのかを知ることができると思われる。以下、歌枕の分類項目数で多いもの上位から4項目を挙げた。

(数字は本稿筆者の集計による歌枕の数)

山に関するもの	(642)・・・山(529)・嶺(58)・岳(24)・坂(23)・隈(7)・岫(1)
海に関するもの	(495)・・・浦(137)・嶋(64)・江(63)・海(59)・浜(40)・崎(32)・津(31)・ 渚(28)・岸(25)・磯(8)・泊(4)・湊(4)
河に関するもの	(310)・・・河(277)・滝(16)・渡(12)・淀(2)・澤(1)・瀬(1)・淵(1)
野原に関するもの	(198)・・・野(129)・原(28)・池(24)・田(8)・沼(8)・林(1)
その他	(245)
	計 1890首

『五代集歌枕』に収められている計1890首のうち、「山に関するもの」(642)は全体の34%、「海に関するもの」(495)は26%、「河に関するもの」(310)は16%、そして「野原に関するもの」(198)は6%である。分類項目ごとの歌枕の数を比較してみると、「山」はその特徴を表現するのが難しいのか、例えば小倉山、嵐山、音羽山、吉野山というように、固有名詞(「○○山」)を使う場合が8割以上を占めている。逆に言えば、固有名詞によって山のイメージは伝わるので、余計な情景描写は

必要とされなかったかもしれない。「河」の場合も7割以上は泉河、宇治川のように固有名詞が使われ、「野」についても同様に、武蔵野、春日野のように、固有名詞によって情景描写がなされている。これに対して、海にかかわる歌枕は、概ね「浦」が3割、「嶋」、「江」、「海」が2割、そして「浜」、「崎」、「津」が1割という具合に、分類項目が特定のものに偏ることなく歌枕が分布している。しかも、海に関するものは12項目もあり、よりその特徴が捉えられていることがわかる。「内陸の民」といわれる日本人が、山や河よりも「海」にかかわる歌枕を数多く残し、その特徴を捉えようとしていることは感慨深い。ただし、「海」に関する歌枕といっても、そこで詠まれているのは主に「浦」、「嶋」、「浜」、「崎」であり、歌枕が集中しているのは瀬戸内海、つまり、内海の海岸、沿岸の景色である。

では具体的に日本の海がどのように描写されているのであろうか。『五代集歌枕』に収められている和歌の一首⁶⁾を以下の通り引用する。

いせの海おきつしらなみはなにもか
つゝみていもかいへつせにせむ 安貴王 (万3-306)

伊勢の海の沖の白波が花であったなら、包んで妻への手土産にもって帰りたい [拙訳]

「伊勢の海の 沖つ白波 花にもが 包みて妹が 家づとにせむ」——これは「伊勢国に幸せる時に、安貴王の作れる歌一首」である。沖の白波を花に見立て、都に残してきた愛しい人を憶う気持ちが込められている。海を目にする機会のない内陸の地に住む者の海への憧れと、海を目の当たりにした感動が表現されているようである。

さらに具体例をもう一つ。次の歌にはイメージの重層性がみられる。⁷⁾

ふかき海のちかひはしらす三笠山心たかくもみえし君かな 堀河 (後拾19-1143)

深い海の如き、仏の誓いはいざ知らず、三笠山のように、心が高くも、見えた兄君ですことよ。 [拙訳]

「深き海の 誓いは知らず 三笠山 心たかくも 見えし君かな」——これは「山階寺供養の後、宇治前太政大臣のもとにつかはしける」堀河右大臣〔頼宗〕の歌であり、「山階寺」とは興福寺、そして「供養」とは永承3年(1048)の修復時のことである。この供養の主催者は宇治前太政大臣頼道(作者の兄)であり、兄の善業に対する賞賛がこの歌の主旨である。「ふかき海のちかひ」とは、法華経普門品の「弘誓深如海」により、観世音菩薩の一切衆生を済度しようとする誓願のことであり、その思いを〈海の深さ〉にたとえている。少し別な角度から頼宗の歌について説明を加えれば、親鸞の有名な「慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」⁸⁾(まことによるこぼしいことである。心を本願の大地にうちたて、思いを不可思議の大海に流す[拙訳])の言葉通り、本願の世界は「仏地」・「法海」という、広やかな大地と海で表されている。人は確かなものに支えられているという実感が大切であり、その安心感があるからこそ日々の生活を送ることができる。「心を弘誓の仏地に樹て」という言葉は、親鸞自身が広く大きな本願の大地に確かに支えられて

いるという慶びを述べたものである。先の興福寺の供養に話を戻せば、歌の作者である頼宗が兄に見たものとは、順境、逆境を問わず人生の縁とする仏地・仏海に深く心の根を下ろしている姿であった。兄頼道の善行に海のごとく深い弘誓を感じ、兄の帰依の精神を三笠山の高さに喩えたのである。

これまでいくつかの歌を引用し、「海」にかかわる歌枕について述べてきたが、「内陸の民」と呼ばれる日本人が、山や河よりも「海」(浦・嶋・浜・崎)への思いを歌枕に込めたのは、視覚的には海の景色の開放性、海面の広がりによるところが大きいのではないだろうか。安貴王にとって海の白波は「花」となり、また頼宗にとって海は「弘誓深如海」^{くぜいじんによかい}のことにつながった。日本の山地は国土の4分の3を占め、山が海岸線近くまでせり出している場合が多い。海岸から眺める海の景色は様々に変化するが、この〈眺める〉という行為はやがて日本最古の造園秘伝書である『作庭記』の設計思想にも活かされていく。すなわち寝殿造に付随した庭の池を大海と見立て、その汀^{なぎさ}部分に手を加え、それが洲浜にも、干潟にもなるという手法である。『作庭記』には池・島の形態、滝の立て方等の方法・手順が書かれているが、これは先に示した『五代集歌枕』にある歌枕の分類項目そのものである。人は様々な景観を愛でて詩歌に詠い、そのイメージは庭作りにも活かされる。「浄土庭園」(宗教的空間)、「寝殿造庭園」(日常的空間)の精神は、例えば現在の東京・お台場の新都市開発事業までも延々と受け継がれている。そして岸から眺める海の景色は、必然的にその先の彼方に存在する〈異郷〉への憧れを人々に抱かせる。

約束の地を求めて

エーリッヒ・ノイマン (Erich Neumann, 1905-1960) は『グレート・マザー』(Die Grosse Mutter)の中で、母性には「優しく、温かく、産み、育て、包み込む」というプラスのイメージと、他方では「怒り、憎しみ、破壊し、呑み込む」というマイナスのイメージ^{グッドマザー}があり、「良い母」と「恐ろしい母」^{テリブルマザー}の両義性を有していることを指摘している。その言葉通りアイルランドの歴史を振り返れば、「恐ろしい母」は〈ジャガイモ飢饉〉というかたちでアイルランドの人々に大きな試練を与えたことがある。

1845年の夏、長雨と冷害により主食であるジャガイモにBlight (胴枯病)が発生し、食料不足により110万～150万人ものアイルランド人が餓死、もしくは飢饉に関係する疫病で命を落としたといわれている。イギリスにいる大地主への地代の支払いもできない貧困の中で、小作農民たちに残された選択肢は海外移住しかなかった。統計では1851年から5年間に90万人以上、さらに次の5年分を合わせると実に120万以上の人たちが国外に脱出し、そのうちの80%がアメリカへの航路を選び後の人生を賭けた。アイルランドからニューヨークへの船旅は元々、飢餓からのスタートであり、〈棺桶船〉と呼ばれるような死と隣り合わせの旅であった。人々は船内でも〈第二の飢餓〉に耐えなければならず、栄養失調と疫病は死者の数を増大させた。

十字架に祈りを込め、アメリカという〈約束の地〉(promised land)に希望を託して〈移民船〉(棺桶船)に乗り込んだアイルランド人の中で、特に女性の占める割合は53%と、他国からの女性数と比較してもその割合は高かった。しかも、他のヨーロッパからの移民は家族連れが多かったが、アイルランド人の場合は独身の男女が多かった。厳格なカトリックで子沢山の家庭では、家の相続か

らもれた子どもたちが海外に活路を見出すのは自然な流れであった

アイルランドの「^{テリブルマザー}恐ろしい母」の元から旅立った移民たちの運命は新天地アメリカの「^{グッドマザー}良い母」に引き継がれたとはいえ、人々は「^{テリブルマザー}恐ろしい母」のことを決して忘れることはない。映画『風とともに去りぬ』の作者マーガレット・ミッチェルの祖先も同じアイリッシュ系であり、その意味では「タラへ帰ろう」という言葉は、作家自身の再生へのプロセスでもあったはずである。「^{テリブルマザー}恐ろしい母」はアイルランドの人々に原点回帰を促し、新たな自分に生まれかわるための機会を与えてくれたのである。

母なる国への回帰

アイルランドの若者は先にアメリカに移住していた親族を頼りに大西洋を渡ったが、その中でも女性の場合は誠実な人柄が評判となり、住み込みのメイドとして働くことが多かった。若者たちは生活費を節約しながら貯蓄や株投資で資産を増やし、その資金は本国の家族に送金したり、本国から家族を呼び寄せるために使われたりして、カトリックのネットワークは拡大していった。ニューヨークの五番街にある「セント・パトリック大聖堂」(St. Patrick's Cathedral) の壮大な建築物はまさにその象徴であろう。移民者たちの影響力は多少なりとも母国アイルランドにまでおよび、これまで従順な聖ブリジットのイメージを押し付けられてきた感のあるアイルランドの女性たちは、文学や音楽などの芸術活動を通して自らの声を発するようになっていく。エドナ・オブライエン (Edna O'Brien 1932-) は小説 *The Country Girls* (1960) で農村から都会に出ていく女性たちを描いたが、その性的描写により当初は発禁処分となった。また、セクシュアルな部分を隠蔽して罪悪視するアイルランド社会への憤りを、オブライエンは小説 *A Scandalous Woman* (1974) にも織り込んでいく。この作品は若さの至から妊娠した女性が、世間体を気にする周囲から強制的に結婚させられ、故郷を追放されて愛のない生活を送る姿を描いたものである。

ヌーラ・ニー・ゴーノル (Nuala Ni Dhomhnaill, 1952-) も、現実の問題を抑圧された弱者の立場から詩作を続けている。詩人の視線は古代アイルランド神話の世界を織り込みながらケルト以前の地母神信仰に向けられている。詩集はゲール語で書かれているが、仲間の詩人が英訳したものが見開きページに対置されている。以下に "The Stone Age" (巨石時代) という詩の一部を引用する。

Imagine a stone getting up each morning,
shaking its rocky shoulders
and moving its stony tongue,
tying to speak; well, that was me.
. . .

地中に埋まる巨石群が身動きせずに眠っている。今こそ肩を震わせ、体をよじり、そして舌を動かして発言する時がきた。それが私なのだ。これまで黙して語らなかつた女性(母)たちの声を代弁するかのように、詩人は自らの作品にカトリックによって縛られた女性(母)ではなく、原初

的な〈ケルトの母〉を描いている。

かつて「^{テリブルマザー}恐ろしい母」から試練が与えられたアイルランドの女性たちは移住先で〈母神〉的な役割を果たし、カトリックの輪は世界中に広がった。その子孫たちはまるで母の懐に回帰するかのようになり、先祖の故郷であるアイルランドを目指してやってくる。これは一般的に〈故地ツーリズム〉(Ancestral Tourism)、又は「祖先ツーリズム」と呼ばれ、このような旅行を目的とするアイルランドへの旅行者、特にアメリカからの旅行者が年々増加している。

母への想いとその払拭

泉鏡花(1873-1939)の『草迷宮』に登場する主人公・^{はこしあきら}葉越明は、迷宮を意味する「^{やわたしらす}八幡不知」で様々なイメージを体験し、母を求めて探求の旅に出る。「迷宮」は同時に〈子宮〉をイメージさせるものとして使われている。小次郎法師が食べていた団子は狂人の^{かきち}嘉吉に石と間違えられ、そのイメージは老婆が海岸で見つける「^{こうみいし}子産石」という多産のお守りの話へとつながっていく。団子と丸石、すなわち小さくて円いもののイメージは鑄掛屋女房の日傘の円形、明神様の侍女の団扇の円形、そして葉越明の拾う五色の鞠となる。これらは容易に母親の子宮や乳房を意味するものだとわかる。また、音の響きとして「玉」は「魂」と結びついて生命的躍動感を表すが、同時に母胎のイメージは死の世界も描き出す。^{ウーム}母胎(womb)と^{トゥーム}墓(tomb)ともなり、豊穰性を意味する「子産石」に、子どもの魂がさまよう河原の暗いイメージが重ね合わされていく。主人公の母の探求は、迷宮の案内役を務める老婆の導きにより死の世界へと下降して行き、死んだ母や他者の魂との交流に至る。話の中では女性を象徴する「手毬」、「饅頭」、「丸窓」、そして「月」のような丸いものが強調される一方で、男性器を象徴する先の尖った「刃物」や「竹槍」が忽然と消えてしまう。これは去勢された男性のイメージを表している。

泉鏡花の場合、母・鈴が妹・やゑの出産のために死去したという事実は忘れることのできない精神的な痛みであり、作家としての活動にも大きな影響を及ぼしたはずである。〈産む〉行為は母体と子どもの双方を危険にさらし、不幸な結果をもたらすことがある。それは母性そのものに先に示した通り、「^{グッドマザー}良い母」と「^{テリブルマザー}恐ろしい母」の両義が内在するからである。『草迷宮』の中では、喜太郎の妻が^{うぶめ}姑獲鳥(産女)として描かれているが、それは出産で死んだ女の霊であり、子どもを餌食にする恐ろしさを備えている。又、両義的なトポス(場所)が内在していることは冒頭にある「^{おおくずれ}大崩壊」の情景描写にも表されている

実際魔所^{おおくずれ}でなくとも、大崩壊の絶頂^{やげん}は薬研^{うつむ}を俯向けに伏せたようで、^{また}跨ぐと^{あふみ}鐙のないばかり。馬の背に立つ^{いわお}巖、狭く鋭く^{くびす}踵から、^{つまさき}爪先から、^{なかくぼ}ずかり中窟に削った^{がけ}断崖の、見下ろす^{ふもと}麓の^{しら}白浪に、^{なみ}揺落^{ゆりおと}さる^{おもい}思がある。

さて一方は長者園への^{なぎさ}渚へは、^{うら}浦の波が、静かに^{ひら}展いて、^{せわ}忙しくしかも^{のどか}長閑に、^は鶏の羽たたく音がするの^ほに、^{ただきつた}唯切立^{いわ}ての巖一枚、一方は太平洋の^{おおなみ}大濤が、^{ゆるや}牛の^{ゆるや}吼ゆるが^{ゆるや}如き声して、^{ゆるや}緩かにしかも^{すさま}凄じく、^{うな}うう、^{うな}おお、と^{そとはま}呻って、^{おおうね}三崎街道の外浜に^{おおうね}大敵りを打つのである。⁹⁾

三浦の「大崩壊」とは横須賀市秋谷の海岸一帯のことで、現在でも「大崩^{おおくずれ}」の字名で呼ばれている。当時は荒涼とした不毛の地だったため、『草迷宮』の舞台に選ばれたのであろう。葉研を伏せたような山は粘土質により崩れやすく、地滑りを起こしやすい。冒頭、小次郎法師が目にする「大崩壊」の情景は、一方では狭く鋭い山の様相を呈しているが、他方では穏やかな相貌を表す。大崩壊を挟んで「長者園の渚^{うぶめ}」(葉山側)は波穏やかであるものの、その反対側(横須賀側)は波が強い。この海の情景は後の「姑獲鳥」の話の予兆でもあり、泉鏡花の母の例からも、〈ウミ(産み・海)〉に纏わる悲しい現実がオーバーラップされているようである。

『草迷宮』の結末の場面、葉越明はシェイクスピアの「ハムレット」のように〈あれかこれか〉思い迷い、無意識(潜在意識)のメタファーである睡眠状態で夢遊犯さながら分身的存在である小次郎法師を毒殺する。これはあくまで夢の中の殺人であり、実際は何事も起こりはしない。その行為はさながら「二重身」(ドッペルゲンガー (Doppelgänger))のごとく、一方を短絡的に抹殺することにより、無限循環の迷宮から抜け出そうとする試みのようである。亡霊と出会った後の「ハムレット」の台詞、「今の世のなかは関節がはずれている、うかぬ話だ、それを正すべくおれはこの世に生を受けたのだ」(The time is out of joint: O cursed spite, /That ever I was born to set it right) (Hamlet 1.5.189-190)と同様の境地に至り、葉越明はもう一人の自分を殺めることにより、迷宮という「葉」を「越」えて「明」に向かう、〈自己再生〉への道を辿ったのである。

原初の聲を求めて

アイルランドの一般家庭では、両足を開いて女性陰部を露出させ、グロテスクな姿をした石象「シーラ・ナ・ギグ」のレプリカを飾ることがよくある。これはキリスト教伝来以前の〈豊穡のシンボル〉といわれており、日本でも同様に「合掌土偶」¹⁰⁾と呼ばれる縄文時代のものがある。合掌土偶は俗にいう〈体育座り〉の格好をしており、陰部を露出し合掌する姿は豊穡祈願や安産祈願の意味があるといわれている。それらは現代人にはグロテスクな姿として映るかもしれないが、世界中にはいわゆる〈円環の生命観〉があり、土偶は〈生命を生む(再生させる)女性〉の象徴として捉えられている。日本で発掘された土偶の中には明らかに意図的に破壊されたものがある。『古事記』に穀物を司る女神「オオゲツヒメ」の遺体から稲や粟、麦などの穀物が生まれる場面があることからわかるように、土偶の破壊行為にはあらゆるものの再生を願う人々の気持ちが込められている。

〈円環の生命観〉は別な角度から眺めれば、それは生命そのものの移動である〈うつし〉とも考えられる。例えば、三島由紀夫の『豊饒の海』の原案になったといわれる『浜松中納言物語』では、主人公中納言は亡き父が転生した唐土の皇子の母親と道ならぬ恋に墜ちる。この輪廻転生物語に特徴的なのは、生命はあらゆるところに〈うつし〉、そして宿されることにある。さらに、この〈うつし〉は生命だけでなく、〈形代^{かたしろ}〉という媒体によっても行われる。「代」とは〈かわりのもの〉でありながら、同時に主たる働きをなすものである。例えば、一本の木を神の憑代^{よりしろ}とすれば、それは木という〈もの〉であると同時に、神の〈うつし〉としての〈神木〉となる。因みに神道では現在のことを「現世^{うつしよ}」というが、やまと言葉では「うつ」は生まれて活動すること、「し」は息をすること、そして「よ」は世の中を意味する。つまり「現世」とは人々が生きているこの世界のことをいう。さらに「現人^{うつしおみ}」

から転化した「現身」は「うつそみ・うつせみ」とよまれ、『万葉集』の中では「人・世(代)」の枕詞としてよく使われている。具体例として短い歌をあげれば、「うつせみの世は常なしと知るものを秋風寒み偲ひつるかも」¹¹⁾(この世ははかないものだと知りつつも、秋風が寒々と身にしみるので、亡き人が恋しくてたまらない。[拙訳])がある。神道では人が亡くなることを「帰幽」、そしてあの世のことを「幽世」という。やまと言葉で「かくり」とは光がなく暗いこと、そして「よ」は「夜」の意味である。神の御加護により人は母の母胎に宿り、この世に生を受けて生涯を全うし、そして神々の住まう世界に戻って子孫たちを見守る。このような連続性、永遠性は神道の特徴の一つである。

ケルト神話・日本神話の礎を成すものとともに八百万の神々 (gods) の存在であり、古代より人々は山、海、岩、木々など、身近な自然物のすべてを信仰の対象としてきた。古代ケルトのドゥルイド思想である「靈魂不滅・転生」は今日までケルト民族の根底に流れており、人々の死生観や自然観を形成している。一方、日本には「鎮守の杜」といわれる神社の森があるが、それは何世代にもわたり人々を見守り続けた神の森である。神々が鎮座する山や森の神域は「カムナビ(神奈備、カンナビ、カミナビ)」といわれ、¹²⁾人々の自然への感謝、神々に対する畏敬、畏怖の念が込められている。又、『出雲国風土記』には穴道湖を取り巻くように「神名備野(茶臼山)」、「神名火山(朝日山)」、「神名槌山(大船山)、神名火山(仏経山)などの記述があることから、「カムナビ」は山岳信仰と深く結びついていることがわかる。『万葉集』にも「神奈備」を詠うものが幾つかあるが、例えば「神奈備の伊波瀬の杜の喚子鳥いたく鳴きそわが恋益まさる」¹³⁾(神奈備の伊波瀬の杜の喚子鳥よ、そんなにひどく鳴かないでくれ。お前の声を聞いていると、人恋しさの気持ちが増してくるから。[拙訳])という歌がある。万葉の時代は、古代から続く神々に対する畏敬の感情が少し和らぎ、自然を自然として賛美し、自然(神)との一体感が詠み込まれていく。明治時代以降に使われるようになった〈英語・ネイチャー〉、〈仏・ナチュール〉の訳語である〈自然(シゼン)〉の考えでは、どうしても〈自ずから然り〉という意味合いが欠落してしまう。仏教では〈自然(シゼン)〉を法(真理)が〈そのまま〉に顕現していることを示す〈法爾〉と同義と捉え、「自然法爾」、「法爾自然」として人間の本来あるべき状態を表した。又、明恵上人は「自然法爾」の意味を「阿留辺幾夜字和」という和語によって表した。今後、私たちは自然との関わりを見直し、自然と共生してきた日本人の感性を取り戻す必要があるのではないだろうか。

回向返照

学校教育のほとんどは〈表象〉による知的活動であると言っても過言ではない。表象(representation)とは英語の語源に則していえば〈代表的な仕方で、再び現前化されたもの〉を意味する。教科書はいわば言語を介した表象であり、〈代表的な仕方で〉一般化された知識や、他者が作成した既存の解釈枠組みで得られたもの、つまり再現前化されたものである。教科書だけではものごとの本質と直接対峙する機会が得られないので、〈体験学習〉が重要な意味を持つことになる。しかし難題は続き、たとえものごとの本質に身をおき真実を理解したとしても、その内容を他者に伝えようとするならば、必然的に言語化(表象化)しなければならない。だから体験したことを言葉で伝えようとする時、人は戸惑い、言葉を選ぶ時間がどうしても必要になる。私たちは〈体験〉

により表象を越えて本質に至る道と、その方向とは逆に〈言語〉という表象に舞い戻る道の、いわば〈十字路 (the crossroads)〉に立たされているといっても過言ではない。

イギリスの詩人ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) は対象との出会いから数年隔てた後、「回想」という手法で詩作を試みたが、その理由は人生で出会う印象の一つ一つを大切に受けとめて心の奥底に沈潜させ、感得されるものを余すところなく表現するためだった。対象から受けた感動なり印象なりを直ちに言葉にすれば、どうしても〈言葉のゆれ〉が生じる。だからこそ詩人はあえて長期熟成に時間をかける「回想」という手法を採用したのであった。

ソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857-1913) のいわゆる「恣意性の問題」において、言葉と対象物との間には合理的な結びつきは存在せず、言葉の発生はあくまで恣意的なものである。すなわち、私たちは対象物を理解した上で名前を与えているのではなく、名前を付けることで世界からそのものを〈区別 (差異化)〉している。その区別の仕方は言語体系によって異なり、絶対的な決まりがあるわけではない。例えば、コップにシャボン液を入れてストローで息を吹き込むとシャボン玉が溢れてくるが、この泡の皮膜で仕切られた空間の一つ一つが言葉であり、言葉は本来、消えては生まれる性質を持っている。泡の大きさはそれ自体の力で決定されるのではなく、周囲にある泡との圧力関係で決定される。言葉も同様に、他の言葉との差異によって初めて意味が与えられるとソシュールは考えていた。「すべては対立として用いられた差異にすぎず、対立が価値を生み出していく。」言葉を綴り、言葉によって空間を創りながらも、先の言葉を追悼するかのようになり、また新たな言葉が綴られていく。まるで揺らぐ小枝にある〈言の葉〉を一枚一枚、手で扱うように前進する。向かう先の前方とは方向性のあるものなのか、それともこれまでに辿った道に戻るものが前進なのか。動くたびに言葉の対立が生まれ、その対立がまた新たな価値を生み出していく。

古来、日本人は森羅万象に神々の力を感じ、慎みと感謝の念を抱きながら自然と共に豊かなところを育んできた。そのような〈崇敬の念〉とは、「説似一物即不中」(説いて一物に似たるも即ち中たらず) という禅語の意味と同様に、心性の本体は言語を離脱しており、いくら言葉にしても言い表すことができないものである。日本人の感性とは山を見て、海を見て、直ちに全体において統一的なものを捕捉する、主客未分・知情融合の状態において働く、まさに独立自全の活動である。日本人は自然界の音を、まるで〈絶対音感〉のように、言葉として捉える。例えば虫の音は〈虫の声〉であり、夏の風鈴は情緒ある〈音色〉として知覚する。また『古今和歌集』にある「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」¹⁴⁾の歌にある通り、歌人は秋の訪れを「風の音」によって気付かされる。まさに「訪れ」とは「音連れ」であり、ここには目には見えない森羅万象の現象を「音」によって感じてきた日本人の感性が示されている。

まとめ・提言

近年、企業や大学機関では自己啓発やストレスチェックを目的とした〈自己分析〉が求められることが多くなった。再考すれば、自己について〈マニフェスト〉することはそう簡単ではない。なぜなら、自己について他者に伝えるためには、まず自己を客観的に捉え直し、熟考した後にその結果を〈言葉で表現〉(作文・記号化)しなければならぬからである。たとえ回答が記号選択であっ

でも、思考段階では言語の力が必要である。結局、人は〈言葉〉を用いて生きる、一つの〈苦悩〉がある。言葉は簡単に表出できると考える人がいるかもしれないが、自己を表現することは、自己を知ることと同様に、最も困難な人間の業である。ましてや何らかの精神疾患を抱えた人には、この一連の作業は酷である。〈自己分析〉のためのテストは必要だが、先ずは「内言」の力を高めていくと同時に、「外言」に導くための言語訓練が優先されるべきである。いわゆる「メタ言語能力」(metalinguistic ability) に関しても、その前提として重要なのは母国語の円滑な運用能力である。国語力を伸ばす方策については他の研究に委ねるとして、ここでは〈読書〉とこれに伴う〈読書感想文〉などの〈文章指導〉を、大学教養課程で実践することを提起したい。一般的に作文力の向上は以下の能力を高めると言われている。1. 人の話や文章を理解する力、2. 物事を道筋立てて考える論理的思考力、3. 表現力、4. メタ認知能力、そして5. コミュニケーション能力。「読書感想文」はこれらの能力を高める上で有効な手段だと思われるが、文部科学省・文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力」¹⁵⁾では「読書感想文」に関する記述が曖昧な表現になっており、推奨の有無が明確ではない。明確な記述にしない理由は、書く者と指導する者の双方にとってその負担が大きいためであろう。ゆえにそこに教育的意義が存在し、大学としての使命があるのではないか。

若者の読書離れが以前から話題になっている。人格の陶冶には経験を積むことが不可欠であるが、人は読書による擬似体験を通して他者を生きることができる。また、先人の知恵が凝縮された(古典)文学作品は私たちに深い沈潜の時間を提供し、自己再生への機会を与えてくれる。古来、日本人が目にする風景は「海」や「山」であり、原点回帰して心の拠り所となるのは「母」の母胎のイメージである。『草迷宮』において主人公・葉越明を見護る女性の観音力は彼の未来までも予見し、葉越はまるで母親の胎内(おくるみ)で安らかに眠る胎児のように自己再生を図ることができた。この主人公と同様に、精神的不安を抱えた大学生は〈読書〉という〈おくるみ〉の中で、今後は「セルフ・エフィカシー」を高めていくであろう。

注

- 1) Bandura, A., *Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change*, (*Psychological Review*, 1977, Vol.84, No.2, 191-215, p.191.) 人の行動は「先行要因」・「結果要因」・「認知的要因」の相互作用からなり、「人は単に刺激に反応しているのではない。刺激を解釈しているのである。」つまり、刺激と反応を媒介する変数としての個人の認知的要因(予期機能)が行動変容に影響を与えるという考えである。
- 2) 佐々木信綱編 新訓『万葉集』上巻 岩波書店, 2010, p.270.
- 3) 『万葉集』上巻 (3-0443,13-3336, 3337, 3339, 3340) 佐々木信綱編 新訓『万葉集』下巻 岩波書店, 2007. (20-4376, 4378, 4402).
- 4) 本居宣長『古事記伝(三)』岩波書店, 昭和17年, 古事記伝十之巻, pp. 75-76).
- 5) 黒田彰子編著『五代集歌枕』(愛知文教大叢書8), 愛知文京大学出版2006.
- 6) 『五代集歌枕』p.170. (万3-306, 6帖3469).
- 7) 『五代集歌枕』p.25. (後拾19-1143).
- 8) 親鸞『浄土真宗聖典(註釈版) 第二版1』本願寺出版, 2016, p.473.
- 9) 泉鏡花『草迷宮』 岩波書店, 1985, p.10.
- 10) 国宝・合掌土器 青森県八戸市 是川繩文蔵
- 11) 『万葉集』上巻 p.150. (3-0465). 移朔りて後、秋風に悲嘆きて家持の作れる歌一首

- 12) この世とあの世の境界や、人が踏み込んではいない結界の意味もある。鎮守の森と呼ばれる場所もそのようなところである。
- 13) 『万葉集』上巻 p.327. (8-1419). かがみのおほきみのみむすめ 鏡王女の歌一首
- 14) 佐伯梅友校注『古今和歌集』 岩波書店, 1994, p.58. (4-0169).
- 15) 「これからの時代に求められる国語力について」(平成16年2月3日付文部科学省・文化審議会答申 p.24.)
「(抜粋) 読書感想文を書くこと自体は子供たちの国語力を向上させる有効な方策の一つであるが、一律に、読書感想文を強制するなど子供たちに過度の負担を感じさせてしまうような指導では、子供たちが物語の中に入り込めず、読書を楽しむことができない。常に子供たちの状況を的確に把握し、意欲を出させるための取組が必要である。」